

すまいるたん



汐入

第134号

平成22年

2月23日

三々輪橋界わい

平成22年9月

第2回

ジョイフル三ノ輪商店街の「ナガオカ」の五十嵐春雄さん（大正14〜平成19）の遺稿集「三ノ輪橋界わい」より

ラジオの交通情報で大関横丁という言葉葉を良く耳にしますが、之に就いて述べてみましょう。明治通りと日光街道が変る地点を「大関横丁」といい附近には同名のバス停もあるのでその名称は多くの人に知られているのだが、横丁そのものは現在どの辺にあたるのであろう。資料でもこの大関横丁の位置が幾つかに分かれています。

一、「荒川史蹟文化財」では「（前略）現在の常磐線ガード下から第六瑞光小学校手前右側までにあたる」とある。道中は普通乗用車一台が通れる位で途中がその半分の道巾になり、東へ折れて進むと日光街道の裏通りに突き当る。

二、「荒川区の歴史」では「大関屋敷横丁（南千住一十六）と記し旧大関下屋敷と旧宗下屋敷の境界であったと思われる。イトーヨーカドー附近の写真を添えている。この道路も道巾がせまく明治通りから北に向い、元新開地通り商店街（ジョイフル三ノ輪）に出て家ごみの道を進むと民家に突き当る狭い三叉路にな

る。

又、ある人は旧大関下屋敷と旧加藤下屋敷の間を北に延び旧石川下屋敷の西側を抜け西に曲り千住間道へ出るとある。まだまだ他の説がありその名称がどれであるか、定かでない。「大関横町由来之碑」は南千住一三三六番、第六瑞光小李家の西北の角にこの碑はある。

明治維新により各大名が廃藩になるに及びましたが、その折の藩主が四十七代大関増業公であり、智徳兼備の英傑にして藩政を行うに教育を以てし、自ら一千余巻を現し、その内容については世界に誇る可き不朽の名著と云われている。在職十三年にして病の為引退して「こま箕輪の別邸乗化亭に住み括裏斎と号し、茶道・歌道等に精通し人心救済に盡力したが弘化二年（一八四五年）三月十九日六十五才の生涯を終わった。大正十三年二月廿一日特旨を以て正四位を贈られた。世人大関公の偉徳を讃へて比地を呼ぶに大関横丁と称へた。」と大関横丁史蹟保存会は述べている。大関家は五十三代続き現代に及んでいる。その大関下屋敷の隣に石川日向守の下屋敷があった。ここの現在の東町会と西町会の一部である。即ち跡地は南千住12、16番から31番まで33番から40番通りである。この跡地に道路の都電側を秋元氏がその前側を大野氏とその娘さんの奥山氏が取得し、それを測地等跡地を整備したのが現在会長松田昇、チェ子子夫妻の祖父である松田菊蔵氏である。後に松

田家も相当の土地家屋を取得し前記の方々の差配として今日に及んでいる。

ちなみに大関藩について小述したので石川様について述べて見よう。石川様は伊勢亀山藩六万石の大名であり、下屋敷地続き五百十八坪を三河島百姓重右衛門から質上げて泡屋敷としたと記されている。三十代に当るのが石川成道氏でその父君は元子爵、大正時代は宮内省式部官や狩猟官を勤め七十歳で亡くなられたが、この方は「殿様氣質がそのまま残っていた」と云われ、四十年代まで毎日のように芸者遊びに興じ又全盛時代の双葉山の後援会に入り、タニマチとして自宅に双葉山を呼び派手に金を使っていたとの事。

明治十七年の華族令によって旧大名は華族となり、二十万、三十万石以上の大名は公侯爵に列せられ、この方々は旧幕時代から莫大の財産を持っていた。一万石以上十萬石までの大名は子爵となったが、これらほとんどはかつての貧乏藩 華族となつてからも収入の大半は十五銀行に投資した金からの利潤で他は上屋敷・下屋敷などが主なもの。

然し、この十五銀行が倒産し父の御乱業がたたって石川成道氏は斜陽の道をたどり現在は消息不明である。

☆すまいるたんふれあい亭
28日（日）12時半〜 瑞光ひろば館（ジョイフル三ノ輪近江屋呉服店路地入り左）
2Fで、中村実さんのアコーディオンと共に昭和の歌を歌いませんか。参加無料